

中日国語教科書に掲載されている漢文についての比較研究

—中学校における『論語』の言葉—

周 福 紅

はじめに

『論語』は、中国古代における著名な思想家—孔子とその弟子たちの言行を記録したものであり、全二十篇で構成されている。古来、儒家の重要な經典著作として後世に大きな影響を与えてきた。日本には応神天皇の時代に百濟を経由して伝来したといわれ、早くから学問の中心とされてきた。現在も中日国語教科書において、『論語』は古典の学習の重要な内容として扱われている。

本稿では、中日中学校国語教科書に掲載されている『論語』の言葉を比較して考察してみた。この考察を行うことは将来の教材の編纂に参考になると考えている。

一、中日の国語教科書における『論語』の掲載状況

本稿で取り上げた日本の中学校教科書は、学校図書、教育出版、光村図書、三省堂と東京書籍の五つの出版社である。出版社によって掲載されている『論語』の言葉の内容と数はほぼ共通している。

中国では、国語の教科書は『語文』という。二〇〇二年に新課程を実施して以来、中国全国の中学生が新課程教科書を使い始めた。全国中小学校教科書審査決定委員会の初審によって、中学校新課程教科書は主に三種類が使われている。それぞれ人民教育出版社（人教版）、語文出版社（語文版）、江蘇教育出版社（蘇教版）から発行されている。教科書に掲載されている『論語』の言葉の内容と数は出版社によって異なる。例えば、中学校一年版では人教版（旧版）は十則、人教版（新版）は十二則、語文版は六則、蘇教版は八則。中学校三年版では、語文版は十則が載っている。

中国の中学校『語文』教科書に掲載されている『論語』の言葉をまとめてみた。(資料)はそれをまとめたものである。

二、中日教科書に掲載されている『論語』の言葉の比較

資料によると、中国の『語文』教科書には二十六則(重なっているものは一則として数える)、日本の国語教科書には十四則(重なっているものは一則として数える)が掲載されている。このように、中国の方が掲載されている『論語』の言葉が多い。「子曰、三人行、必有我師焉。…」、「子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也。」、「子貢問曰、孔文子何以謂之文也。…」など日本の教科書に掲載されていないものも少なくない。『論語』は中国の伝統思想の根幹なので、中国の方が重視しているのだろう。

日本の方では掲載されている『論語』の言葉の数こそ少ないが、中国の『語文』に掲載されていない言葉もある。それは、「子曰、過而不改…」、「厩焼。子、退朝曰、傷人呼。…」、「子夏為莒父宰、問政。…」など八則である。

両方載っている『論語』の言葉もある。「子曰、学而時習之、不亦説乎。…」、「子曰、温故而知新。可以為師矣。」、「子曰、学而不思則罔、思而不学則殆。」などである。

論語は周知のように、孔子とその弟子たちの言行録である。最も多く記載されているのは孔子の言行であるが、曾子・子

貢・子路・子夏をはじめとした有名な弟子たちと孔子との対話や、また弟子たち自身の言葉も数多くある。ところが、日本の教科書に載っているものは「子貢問曰、有一言而可以终身…」を除いて、全て孔子の言葉である。中国の『語文』には、孔子の言葉のほかに曾子・子貢・子夏の言葉もある。

以下では、中国の『語文』に掲載されているが日本の教科書に掲載されていない『論語』の言葉と、日本の教科書に掲載されているのに中国の『語文』に掲載されていない言葉のいくつかについて、分析して説明する。

三、日本の『国語』に掲載されていない言葉

①子曰…三人行、必有我師焉。择其善者而从之、其不善者而改之。

子曰、三人行、必有我師焉。择其善者而从之、其不善者而改之。(述而第七)

「子曰く、三人行けば、必ず我が師有り。其の善なる者を択びて之に従ひ、その不善なる者にして、之を改む」。

通訳 孔子言う、三人の人が同じ道を行けば、必ずその中に自分の師とすべきものがある。自分のほかの二人の中の、善なる者を選んで、それを見倣うようにし、不善なる者にかんがみて、自分の不善を改めるようにする。かくすれば、そこに師はきつと得られるものだ。(『新釈漢文大系 第一

卷 論語

私たちは日常生活の中で、毎日いろいろな人と接触する。そして人々は一定の長所を持つている。中にはきつと私たちは学ぶべき長所がある。換言すれば、人々は自分のよき師よき友になる可能性がある。中国の小中学校ではこの言葉を作文のテーマとして学生たちに書かせている。

『全釈漢文大系 第一卷 論語』には次のような説明が載っている。

人生の師は見聞する社会の随処にいる（中略）。『春秋左氏伝』襄公三十一年に、鄭の子産が「其の善なる所の者は、吾れ則ち之れを改む。是れ吾が師なり。」という。（中略『老子』も「善人は不善人の師、不善人は善人の資」という（第二十七章）。不善者をも反面教師にするのは、人生の智慧のゆたかさに由る。具体的な体験のなかに師を見つけるのである。

②子曰…歳寒、然后知松柏之后凋也。

子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也。

「子曰く、歳寒くして、然る後松柏の彫むに後るるを知る。」
通訳 孔子言う、時節が寒くなると初めて、松や柏が、他の草木は枯れしほむものに、後までしほまないで残っていることがわかる。このように、大事に遭遇して初めて君子の

節操があることが分かるものだ。（『新釈漢文大系 第一卷 論語』）

補説 この比喩も、孔子の当時の人々に親しまれていたものであろう。すぐれた比喩である。このままに、あるいは、多少の変形をして、いろいろな書物に用いられている。その一つ、『史記』伯夷伝に「歳寒うして、然る後に松柏の凋むに後るることを知る。挙世混濁して、清士乃ち見はる」という。（『全釈漢文大系 第一卷 論語』）

『全釈漢文大系 第一卷 論語』によれば、これは比喩の言葉である。孔子の言葉の中には比喩の言葉が多い。日本の国語教科書にはこのような比喩の言葉が掲載されていない。たとえ掲載しても、中学生はその言葉の表面的な意味しか理解できないと考えられているのだろうか。しかし、このような言葉を掲載すれば、中国の歴史や文化をもっと深く理解できる可能性もある。

自然界の冬の到来に対して最後まで「緑の葉」を枯らさず
に守ろうとする松や柏の樹木を、最後まで信念と仁徳を貫く
「誠実な弟子」の姿に重ね合わせている。諸侯からの弾圧や
差別などに負けず、最後まで孔子のもとを去らなかつた弟子
たちの信義と誠実に対して、晩年の孔子は冬の寒さに耐える
松柏の姿を垣間見たのであろう。

③子貢問曰…孔文子何以謂之文也？子曰…敏而好學，不耻下問，是以謂之文也。（『公冶長第五』）

子貢問曰、孔文字何以謂之文也。子曰、敏而好學、不恥下問。是以謂之文也。

「子貢問ひて曰く、孔文字は何を以て之を文と謂ふかと。子曰く、敏にして學を好み、下問を恥ぢず、是を以て之を文と謂ふなりと。」

通訳 子貢が問うて言うのに、「孔文字はどうして文という美しい諡（おくりな）を得たのですか」。孔子答えて言う、「あの人は生まれつき利発でありながら學問に熱心で、目下の人に教えを乞うことを恥としなかった。この故に、文という諡を得たのだ」と。（『新釈漢文大系』

第一卷 論語

孔文字は衛の名門の出身で、姓を孔、名を圉（ぎよ）というが、諡として最高の価値を持つ「文」という諡を与えられていた。子貢は孔子に、「なぜ孔文字が、名譽ある「文」の諡を与えられたのか」と問いかけた。孔子の答は、「もともと彼は明敏で學問を好む人だった。分らないことがあれば、たとえ目下の相手であつても教えを乞うて、それを恥じなかつた。そういう態度は立派であり、だから「文」という諡をもらつたのだ。」と。人にもものを尋ねるのは恥ぢかしいことではない。恥だと思つて聞かずにやりすごせば、なお大恥をかくことにもなる。誰でも知らないことがある。それは当たり前前のことである。こだわりを早めに捨て、下問を恥ぢず、より悔しさの少ない人生に近づけるように思う。

日本の教科書がこの言葉を載せていない原因の一つとしては、「文」という文字の意味と関係があると思う。伝統的な訳によると、「孔文字何以謂之文也」の「文」は諡であるが、郭沫若（注一）の結論によると、「文」を「有名になる」と訳すのが正しい。いったいどの訳が正しいかまだ結論が出ていないようだ。もう一つは「謂」の訳である。「謂」は字面から解釈すると、「言う」という意味であるが、ここでは、漢字の「為」に相当して、「諡を得た」と訳した。以上の二つの理由で、日本の教科書に載っていないかもしれない。

「富貴」に関する孔子の言葉は中国の國語教科書に三つ載っているが、日本の國語教科書には載っていない。高橋均訳の『論語新探—論語とその時代』（大修館一九八二）によると、春秋過渡期における貧富の交代は、『論語』の記述からみると、かなり急激であつたようである。中国での貧と富の分化の問題は古代から現代にかけて、ずっと国家及び社会各階級の関心の焦点である。それで中国の國語教科書に次の言葉が掲載されている。

・子曰く、疏食を飯ひ、水を飲み、脰を曲げて之を枕とす。樂しみ亦其の中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。」

・子曰く、富と貴とは、是れ人の欲する所なり。其の道を以てせざれば、之を得とも処らざるなり。貧と賤とは、是れ人の惡む所なり。其の道を以てせざれば、之を得と

も去らざるなり。」

・「子曰く、富にして求む可くんば、執鞭の士と雖も、吾も亦之を為さん。如し求む可からずんば、吾が好む所に従はん。」

その一方で、日本では貧富の差があるが、中国のように激しいものではないため、教科書に掲載されていなかったかもしれない。このような内容の言葉が、もし日本の国語教科書に掲載すれば、中国の状況に対する認識がもっと深くなると思われる。

四、中国の『語文』に掲載されていない言葉

ここで挙げるのは「既焚、子退朝曰、傷人乎、不問馬。」「子曰、剛毅木訥、近仁。」、そしてもう一つは「子曰、過而不改……」である。

①既焚、子退朝曰、傷人乎、不問馬。

「既焚けたり、子、朝より退く。曰く、人を傷へるか。馬を問はず。」

通訳 孔子の家のうまやが火事で焼けた。朝廷を退出して家へ帰った孔子は、「人に怪我はなかったか」とたずねた。それっきりで、馬のことは問いたずねなかった。

余説 朱子は、孔子は馬を愛しないわけではないが、人を

傷つけんことを恐れる方が多かった。故に馬を問う暇がなかったと説明した。（『新釈漢文大系 第一巻 論語』）

補説「人」は、既の火事を消しに来てくれた近所の人たち。孔子が既の火事を知った時に、何よりも心配したのは、それらの人たちのけがであった。それ故に、家に帰りつくと、私有物である馬のことより先きにその人たちの安否を問うたのである。孔子らしい行為である。「人を傷なへりや」という孔子の言葉で文章を止めておけばよいものを、記録者が余計な注釈をつけたために、却って、動物愛護の精神を疑われることになった。孔子は迷惑である。（『全釈漢文大系 第一巻 論語』）

当時、家畜としての馬は非常に有効な武器でもあり、また高価な財産でもあった。その馬が火事の被害にあっても、孔子はまず自分の弟子や使用人の身の安全を心配して、「人に怪我はなかったか」と問うたのである。財産としての動物の損失よりも人間の安否のほうを先に心配する人道主義者としての孔子の人柄が窺われる章であろう。

日本では、この話をもとにして、「既火事」という落語ができた。この落語については、『日本大百科全書』では次のように紹介されている。

『論語』から出た教訓噺（ばなし）。夫婦げんかの絶えない髪結いのお崎は、亭主の本心が知りたくて仲人（なご）（うど）に話す。仲人は、唐土（もろこし）の孔子は既の

火事で愛する白馬を焼死させながらも、馬にかまわず家来の安否を尋ねたため、家来は孔子を心から尊敬したという話と、麴町（こうじまち）のさる屋敷の旦那（だんな）は、奥方がたいせつな瀬戸物の鉢を持って階段から滑り落ちたときに、鉢のほうばかり気にして奥方の体のことを少しも聞かなかったという話をする。そして、お前の亭主も、お前が瀬戸物を割ったときに、もしも瀬戸物ばかり気にしているようだったら別れてしまえと教えた。お崎は帰宅して瀬戸物を壊す。亭主は驚いて「けがはなかったか」と聞く。「まあ、ありがたい。お前さん、そんなにあたしの体がだいじかい」「あたりめえじゃねえか、けがしてみねえ、あしたっから遊んでて酒飲むことができねえ」。古い江戸の噺であり、八代目桂文楽（かつらぶんらく）が研究を重ねて完成した。「関山和夫」この落語の存在によって、日本人にとって親しみのある話になったのだろう。

②子曰、剛毅木訥、近仁。

「子曰く、剛毅木訥は、仁に近し。」

通訳 孔子言う、剛毅木訥のものは、それが直ちに仁とはいえなくても、極めて仁に近いものである。（『新釈漢文大系 第一巻 論語』）

補説 無欲の者は果敢であり、果敢な者質朴であり、質朴

な者は言葉に遅鈍である。その逆の連なりもまた真実である。この四字は一句で一つの意味をかもし出す。その意味を、孔子は「仁に近し」と受けとめた。学而第一と陽貨第十七とに重ねて見える「巧言令色、鮮なし仁」を、反面から述べたものである。「巧言令色」が古語であったように、「剛毅木訥」も古語である。（『全釈漢文大系 第一巻 論語』）

「剛」は気性や意志が強い、物欲に屈従しない。「毅」は気性が強くて、果斷。「木」は朴と同じで、山出しの木のまま。質朴で飾りのないこと。「訥」は言葉の下手なこと。口数の少ないこと。孔子はこの言葉を通して、人の四つの品質を称賛している。この言葉は中国では中学校の『語文』教材には載っていないが、高校の教材には載っている。中学生にとっては、理解しづらいかもしれない。特に「木」と「訥」との理解であろう。「木」と「訥」は古代では、人を褒める言葉として、質朴で訥弁という意味だったが、現在では貶義語として口数が少ない、人との交流が苦手という意味で使用されている場合が多い。もちろん、口数が少ないのは必ず悪いこととは言えない。「不言実行」と「訥言敏行」という四字熟語がある。は口下手だが、行動は敏速であることを強調している。「不言実行」は文句や理屈を言わずに、黙ってなすべきことを実行するという意味である。「訥言敏行」は「論語」里仁にある言葉「子曰、君子欲訥於言、而敏於行」（子曰く、

君子は言に訥にして、行いに敏ならんことを欲す。」が出典である。

③子曰、過而不改、是謂過矣。

「子曰く、過ちて改めざる、是を過と謂ふ。」

通訳 孔子言う、人は何人といえども過ちのあるものであるが、過ちを犯してその過ちを改めないのが、ほんとうの過ちというものだ。(『新釈漢文大系 第一巻 論語』)

余説 孔子は過ちがあつてはならぬとは言わない。過つたら改めよという。同じ過ちを再び犯さないのが偉いといつて顔回はほめられた。子夏は、小人の過ちや必ず文るといひ、子貢は、君子の過ちは日月の蝕の如くで、すぐ改めるものだと云つた。孟子の、「古の君子は過ちては則ちこれを改む。今の君子は過ちては則ちこれに従ふ」(公孫丑下)というのも、同じ趣旨にもとづく言葉である。(『新釈漢文大系 第一巻 論語』)

この言葉は「子曰く、三人行けば、必ず我が師有り。其の善なる者を択びて之に従ひ、その不善なる者にして、之を改む」と同じで、中国では、ほとんど人々が知っている。ただ、中学校の教科書には載っていないだけである。そして小中学校で作文のテーマとしても書くようにしている。この言葉を読んで、私はこれと似ている言葉を思い出した。それは「人非聖賢、孰能無過。過而能改、善莫大焉」(出自『左傳・

宣公二年』)。この言葉の意味は一般の人は聖人や賢人ではなく、誰でも過ちを犯す可能性がある。その過ちを改めるなら、どれだけいいことになるだろうという意味である。中国では、むしろ、この言葉の方がよく知られている。

おわりに

中国と日本の中学校国語教科書に載っている『論語』の言葉の対照研究を通して、両国とも孔子の学問に対する態度を重視していることが分かった。それだけに、中国の国語教科書に載っているものを日本の国語教科書に入れ、日本の国語教科書に載っているものも中国の国語教科書に導入すれば、両国の文化の交流は一層深まるかもしれない。

本稿は中日の中学校国語教科書に載っている孔子の言葉に対して比較してみたが、小学校と高校の国語教科書に触れていなかった。両国とも中学校国語教科書には載っていない孔子の言葉は小学校、高校の教科書に載っている可能性もあるが、その比較は今後の課題としたい。

注一 郭沫若(かくまつじゃく)——中華民国、中華人民共和国の政治家、文学者、詩人、歴史家。原名は郭開貞で、開貞は諱、沫若は号にあたる。字は鼎堂。中国の近代文学・歴史学の先駆者。日本に留学したことがある。

参考文献 『論語』新釈漢文大系 第一卷 吉田賢抗著 明治書院一九八八年、『論語』全釈漢文大系 第一卷 平岡武夫著 集英社 一九八〇年、『日本大百科全書』小学館。

〔資料〕

以下は『論語』が中国語教科書に掲載されている状況である。

- 初中『語文』人民教育出版社七年級上冊『論語』十二章
- 1、子曰：『学而時習之，不亦說乎？有朋自遠方來，不亦樂乎？人不知而不愠，不亦君子乎？』（學而第一）
 - 2、曾子曰：『吾日三省吾身。為人謀而不忠乎？與朋友交而不信乎？傳不習乎？』（學而第一）
 - 3、子曰：『吾十有五而志於學，三十而立，四十而不惑，五十而知天命，六十而耳順，七十而从心所欲，不逾矩。』（為政第二）
 - 4、子曰：『溫故而知新，可以為師矣。』（為政第二）
 - 5、子曰：『學而不思則罔，思而不學則殆。』（為政第二）
 - 6、子曰：『賢哉回也，一簞食，一瓢飲，在陋巷，人不堪其忧，回不改其樂。賢哉回也。』（雍也第六）
 - 7、子曰：『知之者不如好之者，好之者不如樂之者。』（雍也第六）
 - 8、子曰：『飯疏食飲水，曲肱而枕之，樂亦在其中矣。不义而富且貴，于我如浮云。』（述而第七）

- 9、子曰：『三人行，必有我師焉。擇其善者而從之，其不善者而改之。』（述而第七）
- 10、子在川上曰：『逝者如斯夫！不舍昼夜。』（子罕第九）
- 11、子曰：『三軍可奪帥也，匹夫不可奪志也。』（子罕第九）
- 12、子夏曰：『博學而篤志，切問而近思，仁在其中矣。』（子張第十九）

- 初中『語文』人民教育出版社七年級上冊『論語』十則（旧版）
- 1、子曰：『学而時習之，不亦說乎？有朋自遠方來，不亦樂乎？人不知而不愠，不亦君子乎？』（學而第一）
 - 2、曾子曰：『吾日三省吾身——為人謀而不忠乎？與朋友交而不信乎？傳不習乎？』（學而第一）
 - 3、子曰：『溫故而知新，可以為師矣。』（為政第二）
 - 4、子曰：『學而不思則罔，思而不學則殆。』（為政第二）
 - 5、子曰：『由，誨女知之乎！知之為知之，不知為不知，是知也。』（為政第二）
 - 6、子曰：『見賢思齊焉，見不賢而內自省也。』（里仁第四）
 - 7、子曰：『三人行，必有我師焉。擇其善者而從之，其不善者而改之。』（述而第七）
 - 8、曾子曰：『士不可以不弘毅，任重而道遠。仁以為己任，不亦重乎？死而后已，不亦遠乎？』（泰伯第八）
 - 9、子曰：『歲寒，然後知松栢之后凋也。』（子罕第九）
 - 10、子貢問曰：『有一言而可以終身行之者乎？』子曰：『其恕

乎！己所不欲，勿施于人。（衛靈公第十五）

○初中『語文』語文出版社九年級上冊「《論語》十則」

1、曾子曰：『吾日三省吾身——為人謀而不忠乎？與朋友交而不信乎？傳不習乎？』（學而第一）

2、子曰：『見賢思齊焉，見不賢而內自省也。』（里仁第四）

3、子貢問曰：『有一言而可以終身行之者乎？』子曰：『其恕乎！己所不欲，勿施于人。』（衛靈公第十五）

4、曾子曰：『士不可以不弘毅，任重而道遠。』（泰伯第八）

5、子曰：『富與貴，是人之所欲也；不以其道得之，不處也。貧與賤，是人之所惡也；不以其道得之，不去也。』（里仁第四）

第四）

6、子貢問君子。子曰：『先行其言而後從之。』（為政第二）

7、子曰：『君子成人之美，不成人之惡。小人反是。』（顏淵第十二）

8、子曰：『富而可求也，雖執鞭之士，吾亦為之。如不可求，從吾所好。』（述而第七）

9、子在齊聞《韶》，三月不知肉味，曰：『不圖為樂之至於斯也。』（述而第七）

10、（點）曰：『莫春者，春服既成，冠者五六人，童子六七人，浴乎沂，風乎舞雩，咏而歸。』喟然嘆曰：『吾與點也！』（先進第十一）

○初中『語文』語文出版社七年級上冊「《論語》六則」

1、子曰：『學而時習之，不亦說乎？有朋自遠方來，不亦樂乎？人不知而不愠，不亦君子乎？』（學而第一）

2、子曰：『溫故而知新，可以為師矣。』（為政第二）

3、子曰：『學而不思則罔，思而不學則殆。』（為政第二）

4、子貢問曰：『孔文子何以謂之文也？』子曰：『敏而好學，不耻下問，是以謂之文也。』（公冶長第五）

5、子曰：『默而識之，學而不厭，誨人不倦，何有于我哉。』（述而第七）

6、子曰：『三人行，必有我師焉。擇其善者而從之，其不善者而改之。』（述而第七）

○初中『語文』江蘇教育出版社七年級上冊「《論語》八則」

1、子曰：『學而時習之，不亦說乎？有朋自遠方來，不亦樂乎？人不知而不愠，不亦君子乎？』（學而第一）

2、子曰：『溫故而知新，可以為師矣。』（為政第二）

3、子曰：『學而不思則罔，思而不學則殆。』（為政第二）

4、子曰：『由，誨女知之乎？知之為知之，不知為不知，是知也。』（為政第二）

5、子貢問曰：『孔文子何以謂之文也？』子曰：『敏而好學，不耻下問，是以謂之文也。』（公冶長第五）

6、子曰：『默而識之，學而不厭，誨人不倦，何有于我哉！』（述而第七）

7、子曰…三人行，必有我师焉；择其善者而从之，其不善者而改之。(述而第七)

8、子曰…不愤不启，不悱不发。举一隅不以三隅反，则不复也。(述而第七)

(しゅう ふくこう・本学大学院修士課程二年)